

編集を終えて

編集責任者 植村元覚

富山県の置県百年の記念事業の一つとして「富山県農業史資料集成」上下二巻（一七六〇頁）が出版されてから、はやくも四年の歳月が流れた。この通史が出来るまで長い年月と多大の費用をかけて、三冊目が出版に漕ぎつけることになったのは、富山県のおかげであり、心から感謝申したい。

実は、戦後まもなく、私は独りでこのようなことを計画立案したことがあった。そして県内の各地を回って、史料を探索したり、業者や関係機関を訪ねた。滑川市の堀江が売薬農村として顕著な存在であり、豊かで文化が高いことに気づいたのも、この一端であった。文部省の科学研究費を受けたこともあった。しかし短期間で出来るものではなかった。富山大学の事業として企画してみたが、実現しなかった。たまたま昭和四十七年ごろ県農業振興課で、この苦労話をもち出したのが、県で取りあげて頂く大きな誘因になった。私のライフワークともいえる富山売薬業史の研究が前進することになったのである。

さらにこの期間に、昭和五十年ごろに、砺波市の麻問屋神田家から、同家に保存の約六〇〇冊に及ぶ勘定帳などの経営記録を、富山大学で整理してほしいという話があった。幕末から昭和三十年代に至るまでの膨大な史料であった。この中の勘定帳を明治三年から第一次大戦後までの分を三冊にまとめ、「麻問屋神田家勘定帳」（五二八頁）、「続麻問

屋神田家勘定帳」(三三五頁)、『第一次大戦麻問屋の経営記録』(四三三頁)を出版した。この三冊目は文部省の出版助成によった。日本経済新聞社の同年の優良図書の候補になった。

富山県の二大伝統産業の富山売薬業と繊維産業について、同時平行的に基本的な研究ができたことは、私にとってこの上ない幸運であった。富山を愛し、長く県内に生活してきた者には、研究冥利につきるといふべきである。

常に新しい課題に向って挑戦する学問的姿勢が、研究には必要であることは云うまでもない。本書では、富山売薬業の全体的把握、商業ないし中小企業そのものの在り方の基本的究明に努めると共に、時代の流れの中の諸情勢との関係に留意して、商人たちの時代的課題へのチャレンジ関係、中でも江戸時代には他藩との対外問題や貿易摩擦問題、明治以後は経営の近代化過程と海外売薬に関心をおいた。幸いにも、中国の上海、漢口の懸場帳や戦後の二十一年、メキシコの国際製薬株式会社の決算書が発見され、これをのせることができた。また技術革新の今日、この産業にはバイオテクノロジーの導入が要請されている。これについては、北陸経済研究所がニラ NIRA の助成研究をうけて「富山県のバイオを核とした地域産業振興策」(三二八頁)を六十二年三月に出版したが、私は「研究指導者」として参加させて頂いた。これは新時代に生きる経営の刷新と共に富山県売薬業の今後の課題であろう。

従来、富山売薬業について、部分的な研究は若干存在した。しかし全体像をとりあげ、その特色を浮き彫りにして産業としての意味づけを明らかにしたのは、本書が最初ではないかと思う。しかし究明の不十分な点も少くないのではないかと案じられる。読者の御叱正をお願いしたい。なお本書の成立については、はじめ次の分担で執筆がなされた。即ち、まえがき植村元覚、第一章植村、第二章植村・米原寛・海野京、第三章新田二郎・植村・米原・古川春夫・道正弘、第四章古川・植村、第五章中山実・植村、第六章橋本龍也、第七章須山盛彰・植村、むすび植村であった。

しかし本書は通史であるという性格からして叙述の一貫性のために、各原稿に相当に手を入れ、またその内部編成

も大きく改変して全体の構成をつくり直させていただいた。このことは編さん委員会で予め私が了承をうけ、すべて私の責任においてなされた。私の不勉強のために思わぬ誤りがあるかもしれない。御教導を賜われれば幸いである。

なお、主な史資料、写真の提供については、次の方々のお世話にあずかった。

富山県立図書館、富山市売薬資料館、富山市立郷土博物館、水橋郷土資料館、富山県農業連合会、広貫堂、北陸電力、北日本新聞社、金森長藏氏、高桑靖夫氏、岡本清右衛門氏、飯倉英子氏、県史編さん委員会の皆様その他多くの方々から御芳情を賜わった。また薬草のイラストは能坂利雄氏にお世話になった。これら多くの方々に深く感謝する次第である。

昭和六十二年三月